



桐生ロータリークラブ週報

国際ロータリー第2840地区 2016-2017年度 国際ロータリーのテーマ

2016年



人類に
奉仕する
ロータリー

Rotary Serving Humanity

R.I 会長 ジョン F. ジャーム

善意というものがないなら
ロータリークラブは唯の社交クラブだ。
職業は金儲けのためでしかなく、
社会奉仕というも施しにすぎず、
国際奉仕は外交以外の何ものでもない。

パストガバナー 前原 勝樹

会長 吉田 栄佐 幹事 柳 明彦

クラブ会報・情報委員会

平岩千鶴子・岡部信一郎・日野昇・桑原志郎

10月3日号

第2999回例会

(9月26日(月)第3例会)

楽しい例会・待ち遠しいロータリー



1. 点 鐘
2. ロータリーソング斉唱
3. 来訪者紹介
4. 新会員入会式
5. 出席 100%表彰
6. ロータリー情報アワー

7. 会長の時間
8. 幹事報告
9. 委員会報告
10. 卓 話
「笑う古文」 俳人 山田 耕司 様
11. 点 鐘

** 来訪者紹介 **

俳人 山田 耕司 様

** 新会員入会式 **

株式会社 群馬銀行桐生支店 支店長

荻野 克徳 (おぎの かつのり) 君

(1)推薦の言葉



養田 隆 君

(2)バッチの贈呈



(3)歓迎の言葉

(4)新会員挨拶



荻野 克徳 君

** 出席 100%表彰 **

舘 盛治 君	31 回
吉田 栄佐 君	25 回
村田 勝俊 君	10 回



** ロータリー情報アワー **



坪井良廣
パスト会長
面白写真の紹介

** 会長の時間 **

【報告】

- ・疋田博之君
28年度春の叙勲 旭日双光章受章祝金贈呈



- ・9/21(水) 指名委員会 午後6時半～ 吉野家
2018～2019 年会長候補者 松島宏明君
2018～2019 年幹事候補者 木村洋一君
- ・9/12(月) 第2回会長候補者推薦委員会
桐生倶楽部2号室
- ・9/12(月) ローター財団委員会・
長期計画特別委員会 家庭集会
桐生倶楽部 広間
- ・9/12(月) 第2回桐生 5RC会長幹事会
午後6時半～ 味感
- ・9/15(木) 第2回長期計画特別委員会 家庭集会
午後7時～ 友奴
- ・9/15(木) S.A.A.家庭集会
午後7時～ 友奴
- ・9/18(日) RLI セミナー 園田副幹事出席
午前9時～ 前橋問屋センター会館

【予定】

- ・10/2(日) 桐生青年会議所創立 60 周年記念式典
桐生市市民文化会館
本田副会長出席予定
- ・10/1(土)～2(日) RYLA研修会 川場村文化会館
桑原室長、ローターアクトクラブ会員4名、
沈(しん) 軼驥(いか)君 出席予定

** 幹事報告 **

- ・米山記念奨学会より「ハイライトよねやま」が届いております。
- ・わたらせ養護園より「とんがりやね」が届いております。
- ・日本てんかん協会より「からっかぜ」が届いております。
- ・桐生南、桐生西、桐生中央、桐生赤城の各 RC より週報到着。

** 委員会報告 **

□ 出席委員会

本日の出席(平成 28 年 9 月 26 日)
総員 69 名:出席 44 名
平成 28 年 9 月 12 日例会修正出席率:77.77%

□ ニコニコボックス

- ・飯塚壮一 君、須永博之 君
卓話に山田さんをお迎えして。
- ・坂入勝 君、須永博之 君、大友一之 君、
久保田寿栄 君

- 群馬銀行荻野桐生支店長を新入会員にお迎えして。
- ・須永博之 君
荒木さん、田中さんからほめていただきました。感謝です。
- ・坪井良廣 君
(ロータリー情報アワーで)面白写真の話をしします。
- ・館盛治 君、吉田栄佐 君、村田勝俊 君
出席 100%表彰されます。
- ・堀明 君
疋田先生に写真をいただきました。ありがとうございます。

□ SAA 今日の食事

レストランやまとの「おまかせ弁当」でした。

** 卓話 **



「笑う古文」

俳人 山田 耕司 様

今年もたくさんの自然災害が発生してしまいました。自然の猛威に驚くとともに、こうした自然災害の発生後に、いち早く日常生活を再開する日本人のたくましさや達観のようなものを再確認させられます。

三匹の子豚というお話があります。計画的な防衛構想を持ち堅固な要塞を構えるレンガ豚が理想とされるエピソードですが、これはどうもアメリカ人あたりの心情を反映しているものに思えます。核武装を拡大させてきたのも、中東に潜むオオカミを退治しに行くのも、レンガ豚の発想。一方、日本人はワラの子豚の子孫なのではないかと思うことがございます。度重なる自然災害、その度ごとに、いち早く生活を立て直さなければならぬわけで、そういう事情からしたら、作りやすく、かつ、壊れても環境へのダメージが少なく、建て直しやすい、そんなワラの家こそが、日本人の世界観にふさわしいのです。

日本の古文と申しますのは、よく「もののあはれ」の世界と言われることがあります。世界をなんとなくじんわり感じちゃう力、とでもいうべきものですね。たとえば、こんな感覚を理解する上でも、思い描いておいていただきたいのは、古文の世界にはすだれが下がっていたということです。男と女の間に、すだれ。ちなみにこれがレンガ豚の世界観でしたら、すだれなどという軟弱なもので身を守ることなどできませんから、しっかりとドアに鍵をかけるなり、忠誠を誓った騎士たちに警護させるなりというセキュリティが発動されるどころかと存じます。ところが、ワラ豚にはワラ豚のマナーがある。ママゴトのおうちでもちゃんと玄関と決めてあるところから入らないと、その家の主婦である女の子にしかかれてしまいますね。壊れやすいものだから壊しちゃっていい

いや、というのではなく、壊れやすいものだからこそ扱うサイドあるいは受け取るサイドがマナーを持つべきだ、というのが、ワラ豚クオリティーです。自然に向かい合うときに、打ち勝ってみせると意気込むよりは、自然の姿の中に敏感に何かを感じ取るうとする。そんな姿勢は、こうしたマナーの元でこそ育まれてきたと考えられます。世界に対して声高に主張するよりも、じわりと受け取ることに於いて人間の能力を発揮する「もののあはれ」のような感性は、日本の自然風土を背景としたワラ豚の子孫ならではのものなのだと思う次第です。

さて、さっさと作ることができて再現性もあり、かつ、受け取る相手にマナーを要求する、という手合いのセンスを文学の方に見ていくと思いがたりますのは、「和歌」でございます。和歌というと百人一首の暗記などで懲りた方もいらっしゃるかと拝察します。今日の話は、そんなに壮絶なものではなくて、「ダジャレのセンス」と言い換えることができるようなものです。ご安心ください。

ここで源氏物語のお話をひとつ。

みなさま、源氏物語には、たくさんの魅力的な女性が登場するのはお聞き及びかと思えます。歳上の才女・六条の御息所、はかなくも可愛らしい夕顔、手が届きそうで届かない人妻・空蝉、母の面影を重ねながら共に人の道を踏み外してしまう藤壺、ついに心通わせることが難しかった葵の上、明石の上、朧月夜、花散里、末摘花、朝顔、などなど。華やかな女性たちの中で、源氏の子を産んだ人は、何人いると思えますか？ 答えは、四人。葵の上との間に夕霧くん、不義の関係にあった藤壺との間にのちの冷泉帝、明石の上との間に生まれた姫君・明石の中宮、女三宮との間の薫くんですが正確に言えばこれは女三の宮と柏木との不義の上の子で血は繋がっていませんので、結局は三人ということになりましょうか。では、正妻の座にいたのは、と言いますと、これが二人。葵の上と女三の宮。二人とも身分が高いところから正妻の位についていたとはいえ、源氏と心通わせていた女性とは言い難い描かれ方をしております。では、どの女性と最も心が近かったかといえ、これは紫の上ということで問題ございませんでしょう。幼い頃から源氏の元で育てられ、才能と美貌を持ちつつ、源氏を世界のすべてと頼み、源氏が須磨に蟄居するとすれば堅い愛を誓い合いつつ現地で明石の上という女性を設けられてしまい、源氏の住まいの女主のような貫禄を持てるようになった頃にまだ年端もいかぬ女三の宮を目上の格式でお招きしなければならない、と波乱万丈な女性。幼かった頃の若紫の場面は、いまだに高校の教科書の定番でございまして、授業中に爽やかな睡眠などをおとりになっていらっしゃる方でしたらご記憶にあるかもしれません。紫の上は、源氏の子供もなさず、正妻でもない。しかし、だからこそ応援してあげるのは自分しかいないという気分で読者が感情移入をしてしまうような、『源氏物語』の重要な主役なのです。さて、源

氏物語は、五十四帖といわれ、光源氏退場後の世界が、最後尾の宇治十帖となります。光源氏そのものの死は描かれていません。光源氏ジェネレーション最後のクライマックスは、紫の上の臨終の場面です。

風すごく吹き出でたる夕暮に、前栽見給ふとて、脇息に寄りみ給へるを、院渡りて見たてまつり給ひて、「今日は、いとよく起きみ給ふめるは。この御前にては、こよなく御心もはればれしげなめりかし。」と聞こえ給ふ。かばかりの隙あるをも、いどうれしと思ひきこえ給へる御けしきを見給ふも、心苦しく、「つひに、いかに思し騒がむ。」と思ふに、あはれなれば、

おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱る萩のうは露

病気で寝込むことが多くなっていた紫の上。秋、風の強い夕暮れにやつのことで脇息に寄りかかって庭を眺めています。自らが育ての親となって今は帝の妻となっている明石の中宮が来ているのです。源氏がやってきて声をかけます「今日は、よくぞ起きて座っていらっしやいますね。中宮がおいでになっているとご気分もさっぱりなさっているようで」。紫の上はちょっとした小康状態でさえこれほどまでにうれしいと心動かす源氏の様子を見て、自分が死ぬことよりもその死による源氏の嘆きの大きさの方を思いやって、胸が揺さぶられて一首読みます。

ここで、紫の上は、目の前の庭で風に揺れる萩と、その上の露についての歌を詠みます。お気付きの方も多いと思いますが、この歌の中の「露」は彼女自身の命のたとえ、ですね。風に揺さぶられている萩の葉の上の小さな露のようにはかない存在。さて、人間、いよいよ最期というときです。伝えたいこと、聞いてほしいこと、今まで隠していた胸の内をここぞとばかりに言いたくなる、そんなタイミング。これだけで、この歌の仕掛けはおしまいなのでしょうか。

最初の句にご注目ください。「おくと見る」。この「おく」には、葉の上に「置く」という意味とともに「起く」つまり「起き上がっている」という意味が込められています。源氏の発言「今日は、よくぞ起きて座っていらっしやいますね。」に対するアンサーになっているのです。ね。「起き上がっていると見えていても、もうまもなくこの世を去るのです」というメッセージ。これはこれでせつない内容なのですが、私が皆さんにお伝えしたいのは、人生最期にしていればダジャレを飛ばしているという点です。内容の深刻さはさておき、臨終の立場にある人がここぞと言葉遊びを贈答する。これこそが、日本の文芸の典型的な局面であり、日本文化の特徴なのではないかと、私は考えるのです。

同音異義語を遊びとして贈るということは、受け

取った相手の頭の中において、それが二つの意味に分解され、理解されることを期待しているのです。完成品を渡すのではなく、相手の中で完成する、そうした一歩手前のものを相手に渡す。

受け取る側へのドアを叩き、互いに同じマナーのもとにありますね、と共感を求める行為。そんな風にこうした言葉遊びのことを捉えると、和歌におけるダジャレというのは、実にワラ豚的なのであります。

和歌におけるワラ豚作用にも、それなりに重要なコツがありまして、それが「当意即妙」であります。「当意」すなわち、その状況でしか詠みえないような場のありようを的確につかみ、「即」その場で速やかに、「妙」言葉遊びの工夫が込められていて感動する。前々から用意しておいてはダメなのです。その場でとっさに面白いことを言う。この呼吸こそが、平安時代中期頃の和歌における大切なところなのです。

今日の講演のタイトルは「笑う古文」。笑い話を集めてくるのかな、とご想像の方もいらっしゃるかもしれませんが、私が、今回申し上げたかったのは、「送り手が完成させてしまうのではなく、受け手とともに何かを共有する」、これが日本文学の、ひいては日本人の感性の奥底にあるところなのではないか、そして、その最たるものが笑いなのではないか、ということです。

雅やかな言葉遊びの世界をちょっと離れてみましょう。

ワラ豚の本領が発揮されるのは、狼によって家が吹き飛ばされてから後の立ち直りにおいて。

源平の合戦などの動乱がすぎて時代が鎌倉になった頃、世の庶民たちの元にはこんな話が流れられていました。

これも今は昔、ある人のもとに生女房のありけるが、人に紙乞ひて、そこなりける若き僧に、「仮名曆書きて給べ」と言ひければ、僧、「やすき事」と言ひて、書きたりけり。始めつ方はうるはしく、「神仏によし」、「坎日」、「凶会日」など書きたりけるが、やうやう末ざまになりて、あるいは「物食はぬ日」など書き、また「これぞあればよく食ふ日」など書きたり。この女房、「やうがる曆かな」とは思へども、いとかうほどには思ひよらず、「さる事にこそ」と思ひて、そのままに違へず。またある日は、「はこすべからず」と書きたれば、「いかに」とは思へども、また「さこそあらめ」とて、念じて過ぐすほどに、長凶会日のやうに、「はこすべからず、はこすべからず」と続け書きたれば、二日三日までは念じ居たるほどに、おほかた堪ふべきやうもなければ、左右の手にて尻をかかへて、「いかにせん、いかにせん」と、よぢりすぢりするほどに、物も覚えずしてありけるとか。

歴史の教科書に出てくるのは、政治史であり権力の成り行きのお話。しかし、どんな時にも庶民というのはしたたかに生きています。貴族の世

界などを笑い飛ばし、有無をも言わせぬ話題で笑いを取る。一見、すだれ越しの洗練とは無縁のように見えますが、「な、わかるだろ？」というような読者への球の投げ方に、私はワラ豚の DNA を見ます。戦争などの大規模な不幸がある時には、それぞれに壮絶な悲劇がある。それぞれがそれぞれのことを語りかつ聞くという行為も大切ですが、「それはそうとお互い様ですよ」というときには、笑い。これが連帯と共感を生むのではないのでしょうか。

そういえば、戦国の世が落ち着いて江戸徳川政権が始まると1623年には『醒睡笑』という笑い話集があらわされました。編者の策伝和尚の説法は客の前で話を披露する高座のようなスタイルをとっていたらしく、落語の祖ともいわれている方です。

小僧あり、小夜ふけて長竿(ながさを)をもち、庭をあなたこなたに振りまはる。坊主これを見付け、それは何事をするぞと問ふ。

空の星がほしさに、打落(うちおと)さんとすれども落ちぬと。扱(さ)て扱(さ)て鈍(どん)なるやつや。それほど作(さく)が無うてなる物か。そこには竿(さ)がとどくまい。屋根へあがれと。

微笑ましく、実に楽しい。屈託なく笑える話です。何十年にもわたる戦国の世の果ての笑い話。もちろん松尾芭蕉や近松門左衛門、井原西鶴が登場する前の時代です。

私たちは、相手をさげすんだり貶める以外の笑いの有り様を知っているはずです。初めての人同士でも、災害やつらい事情をくぐり抜けた先でも、相手の心とつながり合う笑い。私たちは、世界を大切にしようとするあまり、自分の正しさや正確さを土台に相手を追い詰めてしまいかねません。相手の心にやさしくノックをして共感の空気を作るのが笑いなのだとなれば、今こそ、日本人の笑いの作法を学ぶ時なのかもしれません。

和歌の方法を思いおこしてみれば、「当意即妙」に相手に言葉を贈る。相手の中で一つの音が二つの意味に分かれてこそ、面白味となる。そんな言葉遊びを現代に求めるとすれば、手っ取り早いところで言えばオヤジギャグということになりましょうか。とにかくスピードが勝負であるところといい相手にしきりと同意を求めるところといい、それなりにワラ豚の DNA のなせる技ということもできるのではないのでしょうか。

古文の命脈を担っているものは、百人一首の暗記よりも、オヤジギャグ。これは私の持論です。ですから、若い世代の方々にはいささかあきられたりしながらもオヤジギャグで場を和ませている人には、日本の伝統芸能保持者の資格があるとさえ思われてくるのです(笑)。

本日の講演は、「オヤジギャグが日本人の心をつなぐ理由について」というタイトルにしたほうがよかったかもしれませんね。